

## 佛乗寺檀信徒の皆さまへ

～寺報「向陽」から～

日蓮正宗 佛乗寺 住職 笠原建道  
講頭 廣田正至

### 「戒名・法名」

今月の御経日において「大聖人様と信徒の葬儀」について御書を拝読し、葬儀のあり方を学びました。その後、ある新聞の投書欄に、「戒名・法名」についての賛否が掲載されておりました。その中で 戒名は必要、戒名は不要との意見が述べられておりました。また、戒名は必要であっても「戒名料」なるものが高価すぎる、法外な金銭を要求された、というのもありました。そこで戒名について考えてみたいと思います。

戒名とは一般には、葬儀の時に僧侶がお付けする名前のことをいいます。死後の名前といういい方をすることもあります。これに対して、生まれたときに付けた生前の名前を俗名といいます。

戒名の意味するところは、戒を受けた後の名前、というものです。したがって、日蓮正宗では、大聖人様の戒、三大秘法の南無妙法蓮華經の戒を受ける、すなわちお寺にお参りをして御授戒を受けた後に下附されることから、大聖人様の戒を授けられた後の名前のことです。

当然のことですが、御授戒を受ける前に戒名はありません。その点からいえば、日蓮正宗以外の宗派でいうところの「戒名」は本当の戒名ではない、といえます。

皆様のお仏壇にある過去帳を御覧ください。十四日には、「妙日尊霊」、十五日には「妙蓮尊霊」と記載されています。これは、大聖人様が宗旨を建立された直後に、御両親を折伏され、お母様に「妙蓮」、お父様には「妙日」という戒名を授けられたことを教えて下さるものです。また同じく一日を開いてみてください。「大行尊霊」とあります。この大行尊霊こそ、総本山開基檀那である南条時光殿の戒名です。さらに、御書の八〇九頁に『法蓮抄』があります。この「法蓮」は御書を頂いた曾谷教信殿の戒名です。同じく六〇七頁には、

「日本第一の法華經の行者の女人なり。故に名を一つつけたてまつりて不輕菩薩の義になぞらえん。日妙聖人等云云」

とあります。これは、佐渡の島で流人としての日々にある大聖人様のもとへ、鎌倉から山を越え海を渡り訪れた女性信徒の純真な信仰を認められて、「日妙聖人」という戒名を贈られたことを述べられたものです。

これらのことから、日蓮正宗でお付けする「戒名」の意義がお分かり頂けると思います。親が産まれた子の成長を願って付けた名前が俗名であり、そこに

は親の願い、希望が込められております。一方の戒名には、日蓮大聖人様の戒を受け、自の幸せと周りの幸せを願って精進をしたことを表す意義があり、信心が基本となって戒名があるのです。

したがいまして、戒名料とか御経料というものはありません。法事やその他のことも、すべて御本尊様への御供養です。御供養は金額を決められるものではありません。

その御供養について、大聖人様は、『日女御前御返事』で次のように述べられております。

「葉王品と申すは、昔喜見菩薩と申せし菩薩、日月浄明德仏に法華経を習はせ給ひて、其の師の恩と申し、法華経のたうとさと申し、かんにたへかねて万の重宝を尽くさせ給ひしかども、なを心ゆかずして身に油をぬりて千二百歳の間、当時の油にとうしみをに入れてたくがごとく身をたいて仏を供養し、後に七万二千歳が間ひぢをともしびとしてたきつくし、法華経を御供養候き。されば今法華経を後五百歳の女人供養せば、其の功德を一分ものこさずゆづるべし」(御書・一二三〇頁)

と。意味は、「喜見菩薩が日月浄明德仏から法華経を学んだとき、その師の徳の高さや法華経の教えの尊さに、身に持っている重要な宝物を全て御供養したが、それでもなお足りないと思い、身体に油を塗って一千二百年もの間身を焼きその明かりを御供養とした。それでも足りないと考え、さらにその後、七万二千年の間、臂を燃やしてその明かりを法華経に御供養した」というものです。

この御文から、御供養は、仏の尊さ、教えの有り難さにたいしてのものであることがわかります。つまり、葬儀などの御供養は、導師御本尊様のお出ましを頂き、亡き方を成仏に導いて頂いた、という思いからのものである、ということ。感謝の心が、御本尊様への御供養として表れたものです。

このように、日蓮正宗の御供養は、信仰からおこるものであり、世間一般で云うところの「布施」とは大違いなのです。

佛乗寺檀信徒の皆さまには、邪宗の者たちのいうことに惑わされることなく、日蓮正宗の化儀を守ることが、我が成仏の道であると信じて、御精進ください。